064　峰床山　040820
◎8：10 坊村駐車場から歩き始めた。６時に家を出たが２時間かかってしまった。以前、5:30 に出た時には、1時間半で着いた。高速を使わず京都市内を通過すると、ここもなんだか近所のようだ。
◎朝、天気を調べると、曇りマークになっている。「あれれ　晴れじゃなかったのか」と一瞬思案もしたが出てきた。歩き出すと、斜面のあちこちにキノコ。茶色の旨そうなキノコ、違う場所には白い大ぶりなもの、シラサギが数羽、食い荒らされたような雰囲気ながら斜面に白色は映える。「キノコは喰ってはいけないよ」
◎ここは健脚向きの山、歩けそうな方を何人かお誘いしたが、皆さん都合が悪かったので今日はひとり。ＧＰＳの初めての試験。駐車場でスイッチを入れるとここを感知した。これは楽しみだと出発。以前から、山でスマホのＧＰＳを見て、「あっちだこっちだ」という方々が増えてきた、「こんな便利なものが　できているんだ　オレはスマホをもたないヒト　ＧＰＳ本体を買うのもなあ・・」と思っていた。「通話ができない中古のスマホを手に入れたら　ＧＰＳ機能は使えるよ」友人から思わぬご意見、それを別の友人に話したら、「いらないやつがある」といただいた。山の地図ソフト：ジオグラフィカを 960 円で購入し、今日が初試験の日である。
◎林道の終点まで 1 時間ぐらい、そこから登る。林道は自転車なら通れるかなというぐらいに荒れている。
◎やっと尾根に出た、えらいえらい、夏の身体のバテが体力を奪っていく、体中を汗が流れるのを感じる、ぶんぶん虫たちがまわりを飛び回る、防虫スプレーを忘れてきた。歩きはじめは大きな木があり、「やあまたあえたね」なんて言いながら植林の中を登っていく。斜度がきつくなり、四つん這いになりながら登っていく。「あ　こっちに踏み跡」そこを頼りにジグザグ登っていくが、よく見ると人の踏み跡ではなく鹿の踏み跡のようだ。鹿はヒトよりずっと身体能力が優れている、彼らはこんな急斜面もポンポン飛んで走って上り下りができる。
◎尾根は、ダラリンポコリンなだらかだ。前回より樹々の緑が茂っている、見通しがきかない。ＧＰＳを手に、「あっちだこっちだ」と迷った。「ええい　落ち着け」紙の地図と磁石を地面に置き、ＧＰＳの画面と見比べた。なれない画面は、「ここがどこやら　どっちにいけばいいのやら」こんなことを 4,5 回繰り返した。
◎「電池が 10%になりました」これには焦った、「ええええ　たよりはお前だけなんだよ　ここで電池が切れたら・・」まだまだＧＰＳには慣れていない、使い方をもっと練習しなければ、地図も精度のいいものを持たなければ、たくさんの反省点、「いやあ　迷った迷った　いい山だねえ　峰床は」
◎なんとか登山道に合流した。峰床方面に向かって歩き始めた。赤いひもが目についた、一年前にオレがつけたひも、アトリエのウエスを割いて持ってきたものを結び付けた。赤い印、赤のビニールテープはよく地面に落ちている、冬の寒さでポロリ落ちてしまうのかな。そのてん木綿のウエスは色落ちもせず頑張っている。
◎オグロ峠にやってきた。水を 1,5Ｌ持ってきたがすぐに無くなっていく。「そうだ　峠のところに水が流れている」それを思い出し飲んだ、旨い、また飲んでペットボトル 2 本に詰めた。流れている水なのに冷たい、湧水が上のほうで大量に出ているのかもしれない、地蔵さんの祠がある。「峰床まで　ピストンして　帰ろう」
◎峰床からすぐに引き返した。この季節 7 時ころまでまだ明るい。往路の迷いの時間、景色も、ぼやき録音も、カメラもする気にはなれなかった。迷うという不安、高所での恐怖、体力を奪っていく、疲れた。帰りも鎌倉山までは何度も迷った道なので、じっくり赤い印を探して歩いている。気持ちの余裕が出てきたので、まわりを見ると魅力的は樹々、暑い中にも涼しい風、きょろきょろ楽しみながら歩いた。
◎ぶっとい樹、これはヒノキかな、相当な樹齢の天然の樹だ。植樹され管理されている杉や檜は、まっすぐに上へ伸びているのに比べ、天然ものは太くて短い、枝もあっちこっちに自由に伸び、まるででっかいおっさんが踊っているような雰囲気ながら、周囲を圧倒している。
◎おおお　やっと鎌倉山まで帰ってきた、疲れた。あれだけ注意していたのにまた迷い込んだ。「ここまで大丈夫先ほど印を確認」頭の中で呟きながら歩いていたのに、赤い印が無い、おかしいな、突然尾根が無くなる。「あれれ　またやったか」「さいごのＧＰＳ」スイッチを押したが、画面が見えない、蓄電量が 5%を切ると使えないようだ。何分かバックすると道がある、「なんで　この赤印を　見落とすか」この山、峰床はいつもこんなふうに楽しませてくれる山だ。9 時間半の山行でした。帰宅は 8 時。

065　記紀-1　090820
　先日、吉野さんからメールが来た。「久々の便り」は、コロナ禍の話、経済の話と続く。
「コロナで疲弊した経済の立て直しにＭＭＴ型の政府施策を論じている人がぼちぼち表れています。ＭＭＴは理論的には均衡財政論の対局にあるのですが実際にはそう簡単ではありません」
もう少し続くが、なにがなにやらの経済専門用語、「これはわからん　これはオレにとって　まったく疎く　門外漢　経済なんて・・」と考えることもあきらめた。添付書類がついていて、「日本書紀で遊ぶ 5」となっている。多分 1 から書かれているのだろうが・・と 5 を読んだ。

　「歴史　そんなもん　知らないよ」と過ごしてきたが、「室町時代は　暗黒時代　そんな暗闇の中から　湧き出るように　芸術が　芸能が・・」という一節を、闇という言葉に惹かれちょっと読み始めた。天皇が、将軍が、荘園が、地頭が、教科書で教えられた言葉が出てくる。「天皇や将軍　そんなのはもういい　そんな人たちの話は」「反対に位置する人々　そやつらのことが　知りたい」「宮中や御殿の生活より　あばら家や洞窟に棲む　ひもじい輩の生活が　見たい」なんて少し天邪鬼なれどそっち方面の人々、這い上がれない人々、逃げ回っている悪人、うそぶいている小心者、そんな人たちに興味が湧いた。芸術は、芸能は、庶民は、とそっちのほうを探し始めた。穢多、非人、山の民、海の民、歌舞伎、絵画、そんなこんなを調べているうちに民俗学に当たった。
　古事記にも興味があって読み始めたがなかなか難しく、最初のころは写真集や漫画を利用してなじんでいった。古事記の中で、神話の部分が面白い、何百もの神々が笑い怒り、だましだまされ、争っていた。次から次に騒ぎが起きる。つぎに当時の日本のこと、話し言葉、字が無かったことなどがわかってきた。外国語としての中国語と中国字（漢字）を巧みに使いこなせる当時の日本人は多くいたらしいが、中国語とまったく違う日本語を中国語に翻訳して漢文で書いたり、中国字の音を日本語に転用したり、漢字の意味だけ日本語に転用したり、様々な工夫が試みられたんじゃないのかな。字ということで大騒ぎだっただろう。
　古事記ということで、「そらあ　本居宣長だよ」ということを聞いた。それまでは本居宣長は三重県松坂の智者ぐらいにしか知らなかったが、人生をかけて、30 年 40 年を費やして、古事記を復活させて翻訳させて世に著した人だと知った。

　日本書記も古事記も、天皇家につながる物語。日本書記は対外的にとくに中国に対して、日本の国の成り立ちを示した著作、日本そのものを誇示し、「日本はこんなに立派な国ですよ」とアピールしたもので、中国文（漢文）で書かれていた。古事記はそれまでの日本古来の言葉を中国字で書かれていた、と簡単にいうが、漢文調にもしくは漢字の音だけを取ったり、まぜこぜであったりと苦労されていたようだ。漢字は中国語を表すための文字だが、日本語を外国の文字で表す知恵苦労がしのばれる。もし仮に、当時の日本人がアルファベットを知らされたら、今の日本語も日本文字もどんな形になっていたのかな、こういうことを調べている方もいるやも。

　本居宣長が神について述べている有名な文がある。思うに日本人は古来より数多くの神を知っていた。八百万の神様、それこそ、そこらここらに転がっている石ころから、後ろの大きな山、立派な樹、海の中にも池の中にも、雨やら風の神様も、どんどん出てくる、オレでも知っている。幽霊も悪魔も神様だ。狐も狸も神様だ。

◎すべての迦微（かみ）とは、古への御典等（みふみども）に見えたるもろもろの神たちを始めて、其を祀れる社に座す御霊をも申し、又人はさらにも云えず、鳥獣木草のたぐひ海山など、其のほかに何にまれ、尋常（よのつね）ならずすぐれたる徳（こと）のありて、可畏き物を迦微というなり。
　そもそも迦微はかくのごとく種々（くさぐさ）にて、貴きもあり賤しきもあり、強きもあり弱きもあり、善きもあり悪しきもありて、心も行（しわざ）もそのさまざまに随ひて、とりどりにしあれば、大かた一むきに定めては論（い）ひがたき物になむありける。

066　記紀-2　120820

何日か前に梅雨が明けた、今年の梅雨はだらだら長かった、「早く明けてくれ」と願っていた。梅雨明け宣言があった後の何日かはスカッと晴れず、なんだか曇っている、一日に一度ぐらいパラパラ降る、そんな天気が続くなと思っていたら、なんと連日の青空、温度もどんどん上がる。アトリエの中、36.7度、湿度46%だ。それまでは30度を少し超えたぐらい、暑いとはいえ身体に優しかった。室内温度が35度を超えると、オレのやる気が無くなる、活気が失せていく。この文章の続きを書こうと思い立っても椅子に座る気持ちが萎えてしまう。

本居宣長が古事記伝に格闘していた時代は、仏教、儒教、神道などの考え方があったという。まだこの時代には西洋の考えは日本にやって来ていない。宇宙の話も深海の話もこれらの考え方からは出てこない。逆に仏教や儒教がアジアのほうからやってくる以前は神道だけだったのか、仏教や儒教がやって来て、日本にも神道があるぞと膨らんでいったのか、そのあたりのことはオレにはわからない。弥生時代には人間社会も大きくなり約束事が出てくる時点で、生きていく考えが出てきていたと思う。ならばもっと以前の縄文時代、定住がはじまって、衣食住が足りない、こっちは足りている、なんて右往左往しながらそれでもサルでない人たちは、生きるための考えをぼちぼち見出していったのではないだろうか。

夜の暗闇が怖い、自然災害が怖い。風や嵐、大雨や洪水。病気も怖い、なんだか調子が悪いと言えども薬も治療法もない、近所の祈祷師が頼りだ。数えきれない恐怖が次から次に襲ってきた都度、人は何かに祈り、何かに縋りついた。

本居宣長の「神の道」

そも此の道は、いかなる道ぞと尋ぬるに、天地のおのづからなる道にあらず、人の作れる道にもあらず。この道はしも、可畏き高御産巣日（たかみむすび）の神の御霊によりて、神祖（かむろぎ）伊邪那岐の大神伊邪那美の大神の始めたまひて、天照大御神の受けたまひたもちたまひ、伝え賜ふ道なり。

宣長の言う正しい、「神の道」とは、古事記に見出す天つ神を始元とする皇統と、そこに伝えられた道である。

伊邪那岐は黄泉の国から逃げ帰り禊をする。穢れを投げ捨てると、様々な神が生まれる。

左の御目を洗ひたまひし時に成りませる神の名は、天照大御神。次に、右の目を洗ひたまひし時に成りませる神の名は、月読（つくよみ）の命。次に御鼻を洗ひたまひし時に成りませる神の名は、建速須佐之男命（たけはやすさのう）

天照大御神は人が目のあたりにする太陽であって・・万国を照らす太陽が、この国土に生まれたことを記すわが古伝は最も貴いものだとみなされる。

折口信夫:今まで出てきている神道概論はつまらない。神典のままに語りだされる神の言説は、天照大神の言説であり、まさしく、「皇国」の自己栄光化の言説である。

「神とは何か」「神道とは何か」折口は、「神道と霊魂崇拝　たまの信仰」民俗学が今日の神道研究の一番重要な役割を果たす。古代信仰、原始信仰、民族のもっていたもの、我々に残していったものを研究する。

古事記、日本書紀、合わせて、「記紀」というこれらの話、なかなか難しく読みこなせない。神話の部分は面白い、これは本当に面白い、よくもこんな面白い発想、面白い感性が出たものだと感心する。記紀の目的は天皇家の歴史、天皇家のために書かれたものだと聞いているが、そこに神道が出てくる。天皇家と神道という話になると、古事記の面白さが半減する。日本人の大好きな天皇家、天皇家のためなら、人も神もすべてを従わせるぞとは、これは面白くない。折口信夫が民俗学を語りだして、最後に、ほっとした。古代の人、縄文も弥生も人々は恐れおののき、神にすがり、わなないていた、それはたしかだと思うが、いかがなものかな。

067　ゲノム　170820
アダム・ラザフォード著＜ゲノムが語る人類全史＞
本著は　素人向けに書かれているとはいえ、生物学、珍紛漢紛の個所がいかにも多い。

高校生向け：ヒトの身体は、1 個の受精卵が細胞分裂を繰り返してできた多数の細胞が、多種多様に分化して形づくられている。それぞれの細胞で働いている遺伝子が違っているが、細胞が持っている遺伝情報は基本的に同じである。ヒトの体細胞の核には、父親・母親由来の染色体が各 23 本の、計 46 本の染色体がある。遺伝情報は染色体の DNA に含まれており、ヒトでは 23 本で 1 組の染色体の DNA が含む遺伝情報をゲノムと呼ぶ。つまり、ヒトの体細胞は、ゲノムを 2 組持っている。
DNA が遺伝子の本体である。ゲノムとは生物種にとって必要な遺伝子の 1 セットのことを言う。有性生殖において各生物種の配偶子に含まれる染色体に存在する全 DNA（遺伝情報）の 1 セットがゲノムです。

ゲノムとは、染色体上の遺伝子が持つ全遺伝情報。
DNA とは、デオキシリボ核酸。生物の遺伝情報を保持している物質。

ネアンデルタール人は私たちより背が低くがっしりずんぐりしていた。樽のような胸をし、横幅の広い鼻と不格好な眼窩上隆起を持っていた。彼らはかなり悪い評判を持っているが単にこうした身体的理由のためであるのは確かだ。俗な言い方では、「野蛮な穴居人 brutish cavemen」「豚のような声を出す薄のろ grunting oafs」低俗で愚かな暴力犯の代名詞。某生物学者は、「ホモ・スツピドゥス愚かな人」と呼ぶべきでは・・と。

こういうのを読むと、ヨーロッパ人はなかなかに差別の才能があると思う。ネアンデルタール人が上記のような類を示す証拠はない。彼らは大型の獣を狩り、肉をさばき、調理していた。縫物をし、衣類や宝石を作っていた。ネアンデルタール人はそれらの道具や技術を、ホモサピエンスから学んだのではなく独力で開発した。洞窟の手描きの絵画、墓所に花粉がある。花を飾ったのではとも言われている。

ネアンデルタール人の完全な DNA（2010 年）がやってきてまだ 10 年しか経っていない。
ネアンデルタール人は喋れたか。1989 年洞窟で発見された舌骨（ぜっこつ）では、ヒトと同様に喋れたか・・。
ネアンデルタール人だけが嗅ぎとれた匂いとは。ヒトは 400 ほどの臭覚遺伝子を持っているが、匂いの複雑な知覚を生み出す仕組みはまだ解明されていない。
◎ネアンデルタール人の正確な遺伝子が解っても、それが厳密に何をしているのかは解明されていない。
◎ネアンデルタール人の遺伝子が、ヒトには 3%前後ある。歴史上何度も交配している。
◎男女がいい仲になって生まれた個人が獲得する遺伝子はまったく運まかせの部分がある。
◎ネアンデルタール人の男と、ホモサピエンスの女の間で交配が起こったと複雑な数値計算からわかった。男は Y 染色体をもっているので、X 染色体は男からは 2 回に 1 回しか伝えられない。2 本 X 染色体を持つ女からは毎回伝えられる。
◎シベリアの奥地で発見された第三の人類、「デニソワ人」1 本の歯と 1 個の指の骨しか見つかっていない。
◎チベット人はその周囲の人と違った遺伝子があり、標高の高いところで暮らしていける。
◎ヒトはミミズやサルとは違う。お互いに妊娠させることは想像もできない。これは数億年の進化によって隔てられている。たった 600 万年しか経っていないチンパンジーとでさえ交雑できない。

ホモサピエンスは 20 万年前東アフリカで出現した。10 万年前中東に。7 万年前アジアに。5 万年前オーストラリアに。4 万年前ヨーロッパに。2.5 万年前シベリアに。1.5 万年前アメリカ大陸に。

068　明神平　190820
◎本日の山は久しぶりの、東吉野村・明神平。7 時に茨木を出発。相澤・前川両様と三人。ソーメンが欲しいと言われ、「直接　買いに　行こう」枡屋の前を通ることにした。明神平は北斜面なので涼しいか、しかも水がある。「なら　ソーメン　お昼に」　明神平はもう何回目かな、50 歳代澤山さんと三重県側から入ったのが一番最初。今も在る天理大学の小屋が見え、「おお　着いた」と思った記憶がある、他の同道者は思い出せない。
◎ソーメン屋の桝井君宅に寄る。彼とは何年かに一度ぐらいのわりで会っているが、会って一目見てニヤリ、もう 30 年の壁が無くなる。彼が二十歳代ぐらいかな、画材屋彩美堂の店員で店にいつも居た、画材の配達にも来てくれた、毎月の我が家のデッサン会に奥山さん共々いつも出席していた。独身の彼には我が娘たちも、「おっちゃん」となついていた。「ソーメン屋なんて　継ぐのは　嫌だ」とぼやいていた姿が思い出される。
◎大阪より 3 時間、10：00 出発。林道沿いに 30 分ほど歩く。左側は 10M ぐらいの渓谷、きれいと感嘆を上げずにはおれない澄んだ水が流れる。今日の山行も一日だれとも会わなかった。
◎一週間ぐらい猛烈な暑さが続いている。アトリエも連日 35 度を超え、午前中はなんとか絵を描けるが、午後になると熱気が充満し何もする気がしない。「明日の山　降りてきたら　どこかで　水浴びをするぞ」と決めていた。林道を歩きながら、するり水に入れるところ、多少深みのあるところ、ここかな、目星をつけて歩いた。
◎林道が終わりいよいよ登山道。ここらあたりは吉野杉の植林地帯だけれど、ほかの樹、でかい広葉樹もある、緑が濃い山の中、水が流れる谷筋を上がっていく。
◎「11 時です　標高は 950 メーターです」ポケットの中の GPS 君の声。前夜に家で、東吉野村役場あたり、登山口あたり、明神平あたり、チェックを入れる。明神平から檜塚奥峰までの間、何か所かをチェックした。ここは何度も迷っている。GPS は登山の前日に行先の地図をスマホの中に保存する必要がある。迷いそうなところは何か所もチェックを入れ入念に保存。だらりとした尾根、右でも左でもどちらでも行けそうなところは、磁石と地図と GPS を併用しても、その場所に行ってみると、「むむむ」ということになる。
◎1 時間ほど登ったところで休憩した。昨夜凍らせたゼリーが程よく融け、冷たく旨い。4 回ぐらいの渡渉があり、ロープを張ってくれている。今の季節は水の中にじゃぼりもいいが、水嵩が多いとか寒い季節は、おいそれとじゃぼり靴を水の中に入れるわけにもいかない。平衡感覚の悪いオレは基本的に、谷筋は嫌いだ。石の上をぴょんぴょんとはすばしこく歩けない、ぼとんばしゃんがおちである。急流や滝はくわばらだ。
◎盛夏の今、体力が相当落ちている、登りが 2.3 時間の山がちょうどいい、岩ゴロゴロをえっちら登る。あれれ、こんなところがあったかなとまわりの赤い印を探したが無い、岩を見るとアイゼンの筋が無数についている、オレも冬に来たな、アイゼンをがちがち言わせて、道は間違っていないようだ。
◎明神平から檜塚奥峰方面に歩きだした。1 時間ぐらい歩く予定で GPS をみまもった。昨日の時点で、迷いやすいいくつかのポイントに印をつけてきた。前回の経験から、ポイントの印が無いと、「漠然と　今どこだ　どっちに行けば　いい」「現在地が　ここだとわかること　次のポイントには　どう進めばいい　そのまた次は」最終目的地のポイントまでたどり着ければ成功である。スマホ GPS も多少慣れてきた。
◎明神平のあたりは標高が 1300M ぐらいある。「今日は　なんだか　涼しいね」「そらあ　この高さじゃ」滋賀県高島トレイルは 700,800M の山が多いが、断然このあたりは標高が高い。木陰の下でじっとしていると、汗が引いた身体がなんだか肌寒い。これではいくらなんでも水浴びどころではないかも。
◎緑の草、太い樹々が風で折れ曲がってる。白い石、虫は多い、またまたオレの耳を集中攻撃してくる。今日は虫よけスプレーを持参した、顔や手に振りかけたが効果が少ないかな、相変わらず虫君たちが寄ってくる。
◎昼飯は水が流れるところでソーメンをいただいた。ミョウガとネギ、ワサビがピリリと旨い。
◎降りてくるとやはり暑い。「さあ　水遊びだ」着替えは全部用意してきたので荷を下ろし、靴を脱いで、ポケットのものをザックへしまい、靴下のままそろり水に入っていった。「わわわ　冷たい　がはは　気持ちいい」ジワリ水の中、しりもちをついて顔に水をかける。オタマジャクシが、カエルがいる。「おお　最高」夏の暑い登山から下に降りて、澄んだ冷たい水に浸かる、至福の時なり。ヤマカガシの子どもも見た。

069　樹々　230820

AM11 時　アトリエの温度計が 32 度を超えた。朝はまだ 30 度ぐらいだったが、32 度を超えたあたりからまわりの空気がむっとしてくる，シャツの中が汗ばんで来る、そのうちシャツを脱ぎたくなる。昨日のピークは 37 度だった。午前中の 3 時間ぐらい、「描くぞ」と決めている、2～3 時間のことなら眠くてもだるくても描ける。1 時間を、2 時間を超えるとだんだん感覚が冴え、一筆二筆入れると、「やったぜ　今日は　おっしまい」である。

毎日、白いキャンバスで新しい絵を描く、それと同時進行で古い絵を、20 枚ぐらいぐるぐるロールに巻いたやつを奥から出し、「ちょっと修繕　いやいや　これはいいじゃない　修繕はなし」なんて描いている。夕方 2 時間河原に行く時間を足し算すると、一日の要時が終わる、日々てんやわんやである。

最近の登山では、写真撮影が面白くなってきて、山から帰ると、IC レコーダーのぼやき文字を整理するのと、100 枚ぐらいとってきた写真を整理するので、これまた登山の翌日はてんやわんやである。そうだ前回の山、始めようと IC レコーダーのスイッチを入れると電池切れ、ザックからスケッチブックの紙を 2 枚と鉛筆を出し久しぶりにぼやきをメモった。ただこの季節、帰るころにはポケットの紙が汗でボロボロに、帰りつぎはぎの悪筆に苦闘した。写真は、中西さんに、10～24 の超広角レンズを勧められて買った。それとスタジオに二三度通って RAW 現像を習った。現像は PHOTO SHOP を使用する。ソフトは 20 年来使っていたが、現像の部門は知らないことだらけだった。カメラは APS 一眼レフを腹のポシェットに入れて持ち歩いている。

六十歳前後から関西の山を歩きだした。それまでは、澤山さんたちと信州のアルプス一万尺の方に目線が向いていた。子供のころから名前は知っていたがまさかオレが登れるなんて、というような山をたくさん登った。「冬のほうが　歩きやすよ」なんておだてられまっ白な雪の山も何回も登った。一万尺という数字なら関西の山は、三千尺かな。奈良県の山が一番高く 1000M～1500M、滋賀県の山は、700M～1000M。山には森林限界という言葉通り、2500M 以上は大きな木が生えない。背丈ぐらいのハイ松などが生えているだけなので、左右の展望がいい。

昔、静岡県の大無間山（だいむげん）に連れられて登った。静岡県だったと地図を見て思い出した。どこかで車を止め大井川鉄道のトロッコ列車に乗った。大無間山は標高が 2300M しかなく、尾根道と言えども木がいっぱいで視界がきかなかった。山下さんが、「こんな　毛のある山　つまらねえ」この言葉がその後我々仲間の間で盛んに使われるようになった。大無間山は南アルプスの端っこの山、おそらく澤山さんのわがままで、最後に残った山で、どうしてもと我々が付き合わされたような気がする。仲間との山行は楽しかった、どこかでテント泊をして、往復を大きな木の間をてくてく歩いたが山の良さはほとんど覚えていない。関西の山は森林限界を超える高さまで行かないので、ほとんどが森の中、森林の中、尾根の一部の風がきついところ、岩だらけのところだけは樹が生えていない、山全部が樹々に囲まれている。どこでも毛が生えている。

衣川・上西、両さんが、「森林浴だ　森の中がいい　緑がいい」とさかんにいわれる。はじめのころは、信州のほうがいいなと思っていた、スギとヒノキぐらいしか知らなかった、山の表情が、樹々の顔色が感じられなかった。最近になっても、木や花や虫や鳥の固有名詞はなかなか出てこない、というより知らない。ならつまらないかと言われると、とんでもない、名前は知らないが、そこらあたりのいろいろが、敏感に響いてくる。

山を歩いていると、時々でっかい樹に出会う。麓の方なら、名前が付けられ立札が立ちそうなでっかい樹が見つかる。そういうでっかい樹や、枯れて枝だけになった樹、それこそ朽ちかけキノコがにょきにょき出てきている樹、倒れ緑のコケが色鮮やかな樹、精霊が宿りそうな樹や、様々な奴がいる、一回の山行でオレの琴線に触れる樹々が必ず数本は見つかる。どんどん彼らの息吹が木霊が響いてくるよ。

070　三重ヶ嶽　270820
◎6 時過ぎに茨木を出た、滋賀県朽木の奥、石田川ダムまでは 3 時間近くかかってしまう。武奈ヶ嶽に続いて、お初の山、高島トレイルも魅力いっぱいだ。熊の影が濃いようだけど会いたくないねえ。
◎落石ゴロゴロ、水たまりに穴ぼこ、そんな道をそろりそろり、あずま屋があり、落合の看板のところに駐車。
◎9：15 石田川ダム方面に 700M ぐらい戻ると登山口がある。雨のなかった何日間、乾いた急斜面をえんやこら、登りきったところからだらだらの尾根道、人が少ない道は荒れている、印も少ない。休憩一本目に冷凍ゼリーを喰った、新聞紙一枚に包んできたがほどよく融け冷たく旨い。昼の 12 時ぐらいにはてっぺんかな。
◎快晴ではないが晴れている。大阪は連日の体温越えだ。ここも涼しくはないが、汗は出るが、樹々の緑で陽は遮られ、微風が吹く、なかなか快適だ。またいだ幹の上に体長 3 センチぐらいの褐色カエル発見、山にいるのだ。
◎道らしき踏み跡に草、枝、倒木、そんな荒れた尾根道をまっすぐだらだら上がっていく。植林地帯が過ぎ、雑木林の森、てんでバラバラねじれ曲がり枝分かれ、樹々の盛んな生命力が素晴らしい。
◎ぞくぞくブナが出始めた、語りかけたくなるような姿、「なんでそんなに　ぐにゅぐにゅ　曲がっているの　なんでそんなに　たくさん株分け　しているの　15 本はあるよ」奇妙奇天烈、楽しませてくれるね。尾根道ながら森の中を歩くよう、時々視界がよくなる、樹の少ないところは風の通り道、風が吹く、涼しい。「あれは　武奈ケ嶽　あれは　大御影山　このあたりの山の　たけは　岳じゃなく　嶽ですね」
◎12 時、てっぺんに到着。さんじょうがたけ、と読む。974M。高島トレイルの中では一番標高が高いかな。てっぺんには広場、鎮守の森のような雰囲気。山のてっぺんは普通、樹がなく岩ごつごつ、樹が生えていても風で横向きに倒れ小さくひょろり立っている、いつも風が吹き、冬には吹雪にさらされているものだよね。そんなよそのてっぺんに比べ、ここのてっぺんはのどかだ。大きな樹がある、ブナがある、「根性の　ねじ曲がり競争なら負けねえよ」ほとほと感心ながら、嬉しくなるような樹の形には破顔一笑、がははである。
◎雨のない日々なのにてっぺんの地面はいささか湿っている、海の蟹に似た赤色を帯びたキノコがひとつ、樹々の緑が無い冬なら、日本海も琵琶湖も見えるだろうが、今の季節はまわりが全部緑あんど緑。
◎さあ弁当、途中、ゼリーや凍ったミカンを喰ったが、固形物が無しという珍しいこと、なので腹が減ってぱくついた。歩き始め、林道を歩いているときからのどが渇き、どこかちょろちょろ水が出ていないかと探したが、雨のない今は地面に染み出ている水しかなかった。涼しいこともあって水は持ってきた 1.5L で足りた。
◎時計回りに回って下る。「えええ　これ　道　藪じゃねえか」下の地面をじっくり調べつつそろり足をおろす。よほど人が来ないのか、藪ぼうぼうの中を、はっぱを、枝を、手で掻きわけそろり進む。地図で見るかぎり距離は短い、まもなく分岐、我々は左に道を取る予定だが、分岐の場所がわかるかな、右だ左だと道標がありそうにもない道、GPS 君登場で、「間違っていない　分岐はまだ先」とそろり進む。
◎「迷ったかな　こっちじゃないかな　そっちかな　おお　ピンクのテープ」所々にピンクのテープをつけてくれている、これにはありがたい。「迷ったかなあ　こっちかなあ　ピンクだあ　ピンク発見」
◎2 時ころに林道に降りてきた。この下山道は、国土地理院地図では破線で書かれている、さすがに破線、道らしきものはあるけれど、ピンクのテープもたまにはあるけれど、途中で迷ってしまうところもあり、慣れていないヒトは入ってはいけない道ですぞ。
◎林道に降りてくるとさすがに暑い、横に川が流れている、夏の山は水浴びが最高、着替えやらタオルやらは車の中に入っている、「車に　着いたら　場所を探して　せめて　冷たい水で　顔を　洗いたい」思いながら林道をてくてく歩いたが、川に降りられる場所が見つからなかった、今回は残念ながら水浴びはお預けである。
◎先ほどの下山時に、足の下、靴が粉を踏んだようだ、地面に散らばったメリケン粉を踏んづけたように煙が漂っている。「え　なに　これは」草の膨らみを蹴飛ばしたら煙るがフワリ、「おおお　胞子かな　こんなやつ　初めて見た」子孫繁栄のためにいくつか蹴飛ばしてご奉仕した。図鑑を見たがわからない。
◎林道歩きが 45 分　3 時に車のところに帰ってきた。
◎帰り、石田川ダムを見入った。長雨梅雨でたっぷり水があるのかと思ったがなく、川がそのまま通過している。

071　キャンプ　310820

◎8月最後の土・日曜日、「テント泊がしたい　初めての　テント」ということで滋賀県方面にやってきた。メンバーは、相・前・番・林とオレの5人、平均年齢は70歳を少々過ぎているのかな。茨木より高速道路に乗ったが、京都東ICの出口手前から渋滞が始まった。「あれれ　やはり最後の休み　皆さん　琵琶湖へ　日本海へ・・」

◎湖西道路で1時間ぐらいの渋滞に巻き込まれ、遠敷峠まで車で登ってきた。釣りの人、川遊びの人、普段は静かな葛川梅の木から遠敷峠に向かう道、たくさんの人が入ってきている。普段、この道はポツンポツンと民家があり、人が住んでいるのかいないのかというくらい過疎が進んでいる、人は少ないが、鄙びた美しい風景、小川沿いの素晴らしい村々である。

◎遠敷峠で登山靴に履き替え、すぐそばに登って昼飯を食った。三国峠の方へ、京大演習林の方へ歩き出した。1時間か2時間歩いたところのおだやかなポコリンでテントを張りたかったが、みなさん20Kの荷を背負って歩くのが嫌そうである。このあたりは熊が多い地域、熊が杉の皮を剥いだ跡がいくつも見える。

◎大阪は日々、体温超えの極暑、夜、「明日の準備をしよう　テント2　コンロ　ボンベ3　コッヘル　マイ食器・・」メモに書き出して並べていたが、アトリエの熱気がおさまらない、「これは　明日の朝　早く起きてでないと　暑くて　できないねえ」ということであきらめた。これを書いているのはその2日後だが、夕方、昨日今日と、一天俄かにかき曇り、オレが河原を走っているときにパラパラと降ってきた。いつものようにバケツをひっくり返したような雨と表現したいのだけど、シャツやズボンが濡れたぐらいですぐに晴れてきた。それでも黒い雲のおかげで、涼しい風、地面の熱気も取れ、「あれれ　爽やか」という具合である。今もアトリエで、これを書いているが、扇風機に当たりながら熱気は感じない。

◎往復2時間の散歩、往路はほとんど下り、おっとっとというぐらいの斜面、「ええい　今日はこれぐらいか　残念ながら　引き返しましょう　帰りは　上り坂　多少時間がかかる　やも」エンヤコラ登りました。この尾根は江若国境尾根、滋賀県の近江と、福井県の若狭の県境の尾根であり、分水嶺の尾根でもある。滋賀県側はヒノキの植林、福井県側は、細いが元気なブナが中心の雑木林、薄暗い森と、明るい森が左右に広がっている。

◎「さあ　それでは　とっておきのテント場に　案内しましょう」ということで梅の木まで戻り、朽木方面に車を走らせた。どこもかしこも人が多い、葛川の河原にも人がいっぱい、「とっておきの場所も　人がいれば　ほかを　探さなければ・・」とそこにやってきた、幸いにも人はいない、それこそ人っ子ひとりいない、「ここでやりましょう」と車から荷を下ろした。

◎テントは4張、「まずは　組み立てたい　買ったばかりなので」ということでそれぞれに組み立てた。オレのものはいつも使っている、「山テン」なので苦もなく2張出来上がった。モンベルの夏テンがややこしい、店員が、「簡単に立てられますよ」と言ったらしいが、Hさん苦労しながらなんとか立ち上がった。

◎「さあ　ビール」「コップ」平均年齢は70歳、嬉々として乾杯を、「猪肉をあぶりましょう」「え　こんなにたくさんあるの」一塊の猪肉を包丁で薄く切って、フライパンで、塩コショウでいただいた。さすがの猪肉、こんな贅沢なものがいただけるとは、ありがたい、旨い・・。

◎夕方から飲み始め、寝たのが11時ころ。イノシシが終わって、野菜いっぱいの豚鍋、最後にその中鍋にソーメン、これも旨い。またまたきれいな夜空も楽しまず大いに発散した。

◎朝は6時ころに起床、みなさんそれぞれに朝の早くから散歩をされたらしい。

◎朝飯は昨日の鍋の残りに水を入れ、ごはんを入れ、おじやでいただいた。オレは2杯も食った。

◎「ちょっと山へ　そのあと　川で　水浴び　しましょう」

◎GPS君のテスト。登山道と違うところを歩いて、登山道を探してみた。簡単なところだけれど登山道と違うところは歩きずらい、坂道を、急斜面を登ったり下ったり、GPS君ではすぐそこが道なんだが、なかなか探せない、行きあたらない。「なかなか　難しいものである」

◎川の方に帰ってくると、「ヒルがいる　逃げていった」なんと皆さん、ヒルにかまれ、悲鳴を上げていた。オレはGPS君のおかげで助かった。汗でぬれた服を着替え車に乗って帰路に就いた。ご苦労様でした。